



わたしの聖戦

女性が働くことについて

146

医学ジャーナリスト・医学博士 植田美津恵

キューバに吹く風

12月17日、オバマ大統領が半世紀にわたって断絶状態にあったキューバと国交正常化に向けた交渉を始めることと発表し、世界を驚かせた。

アメリカとは150キロしか離れていないのに、国交がないためにキューバに行くにはメキシコのカンクンからカナダから入国しなければならぬが、不便さゆえにかえってキューバに対するあこがれが募り、観光客は絶えない。私も数年前にカンクン経由でキューバを訪れ、独特の哀愁あふれるこの国に魅せられたひとりだ。青い海と暖かな気候。人懐っこい人々の笑顔と葉巻、そしてラム酒。へ

ミングウェイが好んだことと知られるダイキリやモヒートは日本でもお馴染みのカクテルだ。

しかし、何といつてもキューバといえればカストロとチェ・ゲバラは外せない。特にゲバラはキューバ革命の指揮を取り、その後若くしてボリビアで暗殺されたことから悲劇のヒーローとして伝説化され、世界中にファンを持つ。

その風貌も根強い人気を支えている。とにかくハンサムという表現はこの人のためにあるのではないかと思わせるほどの美貌である。ちなみに「チエ」は名前ではなく、「やあ」とか「おい」と

いう親しい挨拶を意味するスペイン語。ゲバラがはじめて会う相手に対し、しばしばこう語りかけたことからゲバラにつけられたあだ名だという。キューバの土産として、葉巻とともにTシャツなどのゲバラグッズは観光客



る貴重な国だ。何の前触れもなく起こる停電。昨日出ていたお湯が今日も出るとは限らない。灼熱の国といわれながら、エアコンなどは贅沢品だ。食べ物も配給制で日用品は乏しい。シャンプーも種類はひとつだけ。選んだり迷ったりする必要はまったくない。もちろんインターネットは制限されている。

に大人気である。あまりに便利な環境にはそこから逃げ出したくなる心理が働く。かつての不便だった時代を懐かしく思ったりもする。キューバはそんな思いをちゃんと受け止めてくれ

アメリカ資本が入っていないために、マックもスタバもなければ消費を促す看板も見当たらない。人々が生活していくだけの最低限のものしかなく、それゆえ街が清々しいのだ。情報や日常がいかにも異常であるかを教えてくれる。しかし、そこに住み続けるのはやはり厳しいものがある。今回の動きは、

貧しいキューバの人々にとっては朗報なのかもしれない。

それでも、キューバが変わっていくことに一抹の寂しさがある。資本社会に席巻された世界から取り残されたかのようなキューバを愛した人も多いだろう。今回のニュースを聞いて、日本製の扇風機を30年以上使っていることを自慢げに語ったタクシードライバーの笑顔を思い出した。キューバの人々は総じて長生きだ。「ストレスがないからさ」と陽気に語る彼らを忘れることができないでいる。

キューバが変貌を遂げる前に、もう一度あの風に吹かれてみたい。街のあちこちに刻まれるゲバラの凛々しい顔を見つめてみたい。この国を飛び出して「最後の楽園」へ。今だからこそこの願いを叶えたいと強く思う。

イラスト・伊藤栄章